

連載

# 47 在宅医療奮闘記

平成7年より  
在宅を開始した

私の思い出

(医)東西会 千舟町クリニック院長

橋本 満義 (64歳・内科)

我が家には宅神が祭られている  
～スピリチュアル(霊とか魂)ケア～



宅神  
山頭大権現さまが  
見守ってるから  
死ぬのは何もこわくない...

今から約50年ほど前の話です。中学卒業後、東京・大阪へ集団就職するのが普通だった時代のことです。そうです、私は団塊世代なのです。

そのころ、祖母は脳梗塞で準寝たきり状態となっており、私の母と祖父と町内会の協力で在宅療養をしていました。時代は家族三世同居から二世同居への移行期でもあったのです。当然のごとく人生最期の看取りは自宅でした。

祖母の思いは、恋愛結婚であった祖父と一緒に農業ができない悲しみ、独りになる時間帯のさびしさ、そして死へのおそれ(恐怖)だったのでしよう。信心深い祖母は毎日早朝、屋敷の離れにある宅神(やかつがみ)山頭神社へお参りし、祝詞を唱えていました。

最近、末期がんの緩和ケアがクローズアップされていますが、そのスピリチュアルペインに宗教・思想・哲学などが重要なキーワードとなってきました。また、宗教者が関わった場合でも、患者さんに信仰を押しつけたり勧誘をしたりせず、病气や死後の不安をケアすることがもっとも大事なのです。

平成26年の現代において、核家族化と団塊の世代の介護が、国の社会保障上最重要課題とされています。なぜなら、自宅での看取りが著しく減少しているからなのです。さらに、スピリチュアルケアの選択や質を高めるうえでも、がんの緩和ケアにおいては、キリスト教や仏教とともに、日本古来の思想“神道”も研究し、その役割を積極的に学ぶべき時がきているのかもしれない。

在宅医療元年から20年を過ぎ、現在、成熟期を迎えようとしています。特に終末期から看取りにかけて患者さんが死と向き合う時、スピリチュアルケアが最も大事で困難なのです。ですから、患者さんに対し、どんな哲学・思想・宗教心で接していったら良いか、時空を超えて患者さんのデマンドに応じていくべきでしょう。その選択肢を広げるうえでも、末期がんの緩和ケアにキリスト教や仏教だけでなく、日本古来の神道の思想研究がかかせないのです。  
最近では、ある大学医学部附属病院が「がん哲学外来」を開設したり、医学生と研修医の在宅医療学習を行ったりしています。これらの動向は時代の写し絵で、良い傾向だと思われます。

※宅神(やかつがみ) 平安貴族時代、屋敷の神社に宅神を祭る風習が完成した。その作法を指導した第一人者が時の名声を極めた陰陽師「阿倍晴明」である。  
※橋本家 宅神 山頭神社 山頭大権現 大山積大神 山王大神 蔵王大権現 御祭神 四柱

「お医者さんが来てくれる」

24時間・365日態勢で対応(松山市全域)

私たちは質の高い在宅医療・看護・介護を目指しています。



医師数 18名  
(常勤6名、非常勤12名)  
内科・外科専門医 15名  
(国立がんセンター勤務歴有3名)  
精神科専門医 2名  
麻酔科専門医 1名  
(ペインクリニック科)  
※某医科大学 医師臨床研修協力施設内定

Hyper Blood Viscosity(高血液粘度群)を科学する  
臨床生命科学(体質・病態学、栄養学)研究所開設

機能強化型・有床 在宅療養支援診療所

(医)東西会 千舟町クリニック

松山市千舟町6-4-9 Tel:089-933-3788  
http://www.touzaikai.jp/